

東 海 の 古 代

第205号 2017年9月

会長 : 竹内 強

副会長・発行 : 林 伸禧

編集 : 石田敬一

投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

HP : http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

愛知サマーセミナーの 感想文

平成29年7月17日(祝)に同朋大学で行われた愛知サマーセミナーにおいて、当会は「教科書が書かない本当の古代史」をテーマにゼミを行いました。

前号に続き、ゼミに参加された方々の感想文です。

中学2年(女)

思っていたよりも細かくてびっくりしました。もっと簡単な理由で教科書と違うと言っているのかと思いましたが、昔の本などを見て詳しく調べられていて感心しました。

今までは教科書を全て信じていたので、少し自分でも調べてみようと思いました。今まで知らなかった言葉やいろいろなことを知ることができたのですごく良かったです。

ただ、漢字だらけで私には少し難しかったです。途中でどのプリントのどこを見ているか、わからないことがありました。

中学2年(女)

邪馬台国にたくさんのウラの事情があるとは知りませんでした。たくさんの書物をもとに本当はそうだったんじゃないかと考えるのが楽しかったです。

また、建元や改元の使い分けなど知らなかったことを多く知ることができ良かったです。資料が無かったところがわからなかったので残念でした。年号に重複しているものがあると知ってびっくりしました。たくさんの資料があってとてもわかり

やすかったです。

今歴史を勉強しているのですが、また自分でも疑問に思ったら調べてみたいです。

高校1年(男)

教科書で習ったことが常識だと思っていましたが、この講座を聞いて、実は違う呼び方だったなど、学校では教えてくれないことを知ることができました。

高校1年(男)

資料があったので、どこをどう説明しているのかがすぐにわかった。邪馬壹国のように教科書が書かない本当の国名が他にもあるのではないかと興味を持ちました。

年号は自分が思っていた以上に奥深いものだと思いますが、知らない言葉が出てくるとよくわからなくなりました。

高校1年(女)

少し難しい話でしたが、邪馬台国ではなく邪馬壹国と三国志で表記されていたから邪馬壹国ではないかということを初めて知り、驚きました。

年号については少し難しいところもありました。

高校1年(男)

最初は思っていたよりも難しいお話でした。でも、しっかり考えて聞いていくと、なるほどと思うことが何回もありました。

とてもいい経験になりました。

高校1年(女)

最初はよくわからなかったけど、少しは興味が出た授業だったので良かったです。

自分の知らないことを教わり、いい経験になりました。

高校1年（女） 邪馬台国が邪馬壹国というなんてビックリしました。なぜ、教科書は本当の事を書かないのか、よくわかりません。	一般（男66歳） 九州北部しかありえない。 そのままの数字を考えると九州を通り越してしまうとか、依然として、いろいろな見方があるのかな。九州北部説は他の九州説と同じ？ 難しい。
一般（男30歳） 邪馬台国について、九州説、畿内説と、多くの学者が研究してもなかなか結論が出ていない中、故古田先生の流れでいろいろ研究されている方がみえるのに感銘を受けました。 自分としても、少しずつ古代史に興味が湧いてきました。	一般（男74歳） 邪馬壹国（3世紀まで）→邪馬台国（5世紀以降）。本日の講座で初めて邪馬壹国という国名を知った。 いろいろな学者の意見があって、長い年月の間には新しい発見が見つかるかと又逆転させられる。真説といわれる大発見が見つかるのが待ち遠しい。 建元、改元については、古事記や日本書紀又は外国史書に基づき年号が細かく表示されていますが、正直、私にはあまり興味がわからなかった。古代史においてヒミコの日本統一に向けての活躍の裏話があれこれ聞けたらと期待してきましたが、次の機会を待ちたいと思います。 本日はどうもありがとうございました。
一般（男38歳） 勉強になりました。 ありがとうございました。 年号についての講義は、資料を多く準備して頂いたのに話の中でどの資料のどの頁を見ているのかわかりづらかった。	一般（男） 古田さんの「邪馬台国はなかった」は若い頃、読んだ記憶があったので参加させてもらいました。 東海にもまだこんなに研究者が居られるのに驚きました。 久しぶりに本格的な古代史の話を聞けて楽しかった。
一般（男50歳） 日本の古代史は実際はわからない部分があるが夢があって楽しい。 干支が難しいなと思っていましたが、本日の講義で理解のための資料をいただきました。 テーマが違うかも知れませんが、中部地方の古代史や神社の歴史、古墳などのセミナーもしていただけたらと思います。	

『記・紀』神話と倭国

一宮市 竹蔦正雄

1. はじめに

『記紀』神話が表す世界と倭国の関係を考察した。『記紀』神話の世界はいつ頃から始まり、どのような事をモデルにしているのかを推考し、それが何を意味するのか、更に、それらと倭国の関係を考えてみた。

参考資料として、小学館の新編日本古典文学全集『日本書紀』①(以下、新編『書紀』①という)、角川書店の角川文庫『新訂古事記』(以下、新訂『記』という)、講談社の学術文庫『日本の歴史02』王権

誕生(以下、学術『歴史02』という)を使用した。

2. 『書紀』神代上

(1) 第一段

第一段では「天地開闢と三柱の神」(新編『書紀』①、19頁)について書かれている。三柱の神の誕生は、本文及び一書の第一～第六に共に「泥の中より萌え出る葦の芽のようであった」としている。これは、春になり湿地帯の泥の中より芽生え出る葦の復活を喜び、尊ぶ事を示している。春になっての生命の復活には、蕨や芹などの植物の復活のほか、蛙や蛇などの動物の復活もあるが、葦の芽生えを選んだのは湿地帯からの復活であったからである。湿地帯は水稻を育てる大切な所である。この水稻の育つ湿地帯は何処の湿地帯かを考え

てみる。「東海の古代」第203号(2017年7月)で葦原中国について考察した。そして、そこは水稻が豊かに育つ湿潤な土地で、倭国の北部九州であるとした。つまり、三柱の神が誕生した所は倭国の北部九州である。この北部九州であることは三柱の神の名も示している。三柱の神とは、国常立尊・国狭槌尊とよくむぬと豊斟淳尊うましあしかびひこち又は可美葦芽彦舅尊である。これら三神の名は土着の神、国つ神である事を示している。土着の神とは、縄文の自然神の事である。つまり、この物語は玄海灘沿岸地域に水稻農耕が伝わり定着した(学術『歴史02』78頁)、縄文晩期後半から弥生前期初めにかけての紀元前500～紀元前300年頃の事をイメージしている。

(以下、「紀元前」は「前」で示す。)

このように、第一段は北部九州の三柱の神の事が主体であるが、一書第四に「**高天原の三神**」(新編『書紀』①、21頁)と第六に天常立尊(同23頁)の天国の神の事が書かれている。天国は前述の「東海の古代」第203号で対馬国であるとした。天国の高天原の三神は倭国本土の北部九州に対抗した勢力の台頭を示したものと考える。この三神の名は天御中主尊あまのみなかぬしと高皇産靈尊たかみむすひ・神皇産靈尊かむみむすひである。後者二神の名の「皇産靈」は生成の霊力の表象(新編『書紀』①、21頁頭注)である。前者の「御中主」は高天原の神聖な中央に居る主君たるお方(新編『書紀』①、21頁頭注)であるが、もう一つイメージするものがある。それは、北部九州の縄文晩期後半からの遺跡(福岡県粕屋町江辻遺跡しょうぎくわ:学術『歴史02』52頁)などに見られる松菊里型堅穴住居ソンクンリである。この松菊里型堅穴住居は韓国忠清南道扶余で発見されたもので、縄文晩期後半の前5～4世紀頃のものである。この堅穴住居には中央に二本の主柱があり、この主柱の存在が「御中主」をイメージするものとする。以上の事より、『書紀』神代上第一段は、前500～前300年頃の事と考える。

『書紀』第一段に対し、『記』は天つ神である高天原の三神の誕生から始めている。三神の名は天御中主神と高御産巢日神・神産巢日神である。次に宇摩志阿斯訶備比古遲神と天常立神の天つ神二神を誕生させ、独り神の最後に国つ神の国常立神と豊雲野神の二神を誕生させている。つまり、『記』は近畿政権でなく、天国である九州王朝を主体に書いているのである。この事は後の所々に現れる。

(2)第二段、第三段

第二段は「**四対偶の八神**」(新編『書紀』①、23頁)の紹介で、第三段は第一段で登場した独り神の国つ神三神を各一代とし、第二段で紹介した八神を男女対偶にて一代とし合わせて七代と数え、「**是を神世七代と謂う**」(新編『書紀』①、24頁)としている。八神の名は、**湍煮尊・煮尊**うひちに すひちに、**大戸之道尊・大苦辺尊**おもだる かしこね、**面足尊・惶根尊**、**伊奘諾尊・伊奘冉尊**である。この前者三つの対偶神は防塞神の表象(新編『書紀』①、22～23頁頭注)である。つまり、環濠集落の守護神である。因って、この神々は水稻農耕が定着した前400～前300年頃の北部九州での伝承と考える。そして、残る対偶神の伊奘諾尊・伊奘冉尊は、第二段一書第一に惶根尊の子とあり、また、同第二には国常立尊—天鏡尊—天万尊あわなぎ—沫蕩尊—伊奘諾尊の系譜(新編『書紀』①、23頁)を挙げている。これは、伊奘諾尊が三対偶神より少し遅れた存在であることを示している。その時期は縄文晩期末～弥生前期初めの頃で、西日本各地へ水稻農耕と環濠集落の拡散が始まった前350～前250年頃である。

(3)第四段

第四段は伊奘諾尊・伊奘冉尊による「**礪馭慮島**」と「**大八洲国**」の誕生(新編『書紀』①、25頁)の説話である。

①礪馭慮島

『記紀』神話は第一段及び古事記本文の初めに見るように、海人族の天国の伝承説話である。因って、これら国産みの物語は、天国の発展と倭国領土の拡大過程を示しているものとする。先ず、礪馭慮島を獲得し、そこで繁栄し、倭国本土への進出を果たし、次に西日本を領土としていった過程を示している。是を基にして考えると、南方の海洋族が辿り着いた所が礪馭慮島と考えられる。その「**礪馭慮島を国中の柱として洲国を産生まんと欲した**」(新編『書紀』①、25頁)のである。そうしてみると礪馭慮島は天国の本拠地の対馬島を指していると考えられる。

②大八洲国

『書紀』本文と一書にある「**洲・嶋**」名と比定地を表にする。

第四段	洲名・嶋名	通説比定地
本文・一書	淡路洲	兵庫/淡路島
本文・一書	大日本豊秋津洲(嶋)	本州
本文・一書	伊予二名洲	四国
本文・一書	筑紫洲	九州
本文・(一書)	億岐(三子)洲	島根/隠岐島前・後
本文・一書	佐度洲	新潟/佐渡島
本文・一書	越洲	北陸道
本文・一書	大洲	山口/屋代島 又は 愛媛/大三島
本文・一書	吉備子洲	岡山/児島半島
本文・(一書)	対馬嶋(洲)	長崎/対馬上・下島
本文・(一書)	壱岐嶋(洲)	長崎/壱岐島

*通説比定地：新編『書紀』①、27～28頁

次に、『記』上つ巻の「島々の生成」にある島名、別名、比定地を表にする。

島名	別名	通説比定地
淡道の島	穂の狭別	兵庫/淡路島
伊予の二名島	愛比売、 飯依比古、 大宜都比売、 建依別	愛媛、 香川、 徳島、 高知
隠伎三子島	天忍許呂別	島根/隠岐島 前・後
筑紫島	白日別、 豊日別、 建日向日豊久 土比泥別、 建日別	筑前・筑後、 豊前・豊後、 肥前・肥後、 球磨・於曾
伊岐島	天比登都柱	長崎/壱岐島
津島	天狭手依比売	長崎/対馬上・下島
佐度島	なし	新潟/佐渡島
大倭豊秋津島	天つ御虚空豊 秋津根別	近畿地方
吉備児島	建日方別	岡山/児島半島
小豆島	大野手比売	香川/小豆島
大島	大多麻流別	山口/屋代島、 愛媛/大三島
女島	天一根	大分/姫島
知訶島	天忍男	長崎/五島諸島
両児島	天両屋	所在不明

*通説比定地：新訂『記』23～25頁

『記紀』の大八洲国と処々の小島の扱いに違いがある。この違いを考察する。

第一に、『書記』は大洲と吉備子洲を八洲に入れて、対馬嶋と壱岐島を外している。『記』は津島と伊岐島を大八島に入れて、大島と吉備児島を処々の小島に入れている。第二に、『書記』は越洲を大八洲に入れるが、『記』は大八島にも、処々の小島にも入れていない。第三に、『書記』は大日本豊秋津洲を淡路洲の次に登場させているが、『記』は大倭豊秋津島を大八島の最後の8番目に登場させている。第四に、『書記』には処々の小島は無いが、『記』には六つの処々の小島を登場させている。これらの違いを考えてみるに、大八洲国の誕生説話が出来たのは、6世紀後半以降であることによると考えられる。

第一の違いは、蘇我稲目が吉備五郡に白猪屯倉を置いたことに始まり、馬子が同屯倉に田部を増やした事など吉備支配が強化されたこと、それと同時に瀬戸内の海上交通の増加に伴う大洲の重要地化などにより、壱岐・対馬より両地区の地位が向上したことよると考える。

第二の越洲は継体天皇の即位と継体朝の成立による。

第三の違いは、第四の違いと関連している。また、古事記が藤原不比等による日本書紀の編纂先導書であることにも関連していると考えられる。『記』の処々の小島の誕生の記事に「然ありて後還ります時に、吉備の児島を生みたまひ。」(新訂『記』24頁)とある。この「その後帰った時」とは、何をして、何処へ帰ったのだろうか。それは、前文段の国産みの後に本拠地の天国へ帰ったことを意味するのである。つまり、X地点から九州・倭国へ帰ったのである。『記紀』神話は本来、北部九州がその中心地であるが、『記紀』編纂の時期に近づくと、その時の中心地である近畿が顔を出してくる。即ち、X地点とは近畿である。それを踏まえて『記』の大八島の誕生順を見てみると、淡路島、伊予、隠岐島前・後、筑紫、壱岐島、対馬島の順である。つまり、天国から遠い順に並べて近畿が中心地である事を匂わせている。そして、本来の倭国神話には無い「大倭豊秋津島」を最後に入れたと考える。即ち、「大倭豊秋津島」は本州でなく大和盆地の葛城地区を指しており、神武三十一年の条の

腋上の嘸間丘(御所市東北部)からの情景の記事(新編『書紀』①、235頁)に繋いでいるのである。

また、大八島の一つの「佐度島」は新潟県佐渡島とされているが、これは島根半島のことである。佐度は〔サ・浜、ト°岬〕で、浜と岬で出来た所を意味し、大八島の中に最大の強国・出雲が入ることになる。

次に、処々の小島六島である、吉備児島、小豆島、大島、女島、知訶島、両児島について考える。これら六島も大八島と同じ理由で天国・倭国より遠い順に並べられている。つまり、これらは近畿と倭国との間の瀬戸内海に配列されていると思うのである。しかし、知訶島は長崎県五島列島に、両児島は所在不明とされている。そこで、この六島を改めて検討することにした。吉備児島と小豆島は通説比定地で良いが、問題は残る四島である。

まず、大島であるが、この島は後の女島と対を成す男島であり、大山祇神社のある大三島と考える。その対を成す女島は別名を天一根とある。一根とは一つの本になるものがあることを示しており、ここでは島の中央の山と考える。その山とは厳島の弥山である。弥山は標高535mで海上から見るに畏敬の念を抱く山である。また、この弥山のある厳島は神武が7年間滞在した安芸の国の入り口である。因って、女島は厳島と考える。次に、知訶島であるが、知訶とは〔チ主体、カ端〕で〔主になるものの端にあるもの〕の意で、後の〔近い〕である。ここでは国東半島の近くの姫島を指している。姫島は小さな島であるが、交通の要所であり、黒曜石を産出する重要な島であった。最後に、両児島であるが、双子であるからには近くに在って、よく似ていなければならない。是を満たすのは関門海峡の兩岸である。狭い関門海峡を兩岸から挟み込む光景は双子そのものである。

以上のように、第四段の国産み神話は倭国の発展とその影響力の拡がりを物語るものであり、その時期は遠賀川系土器や水稻農耕、環濠集落が西日本へ定着(学術『歴史02』26～28頁)していった前250～前150年頃のことと考える。

(4) 第五段、第六段、第七段、第八段

第五段は天照大神・月夜見尊・素戔鳴尊の誕生(新編『書紀』①、35頁)説話である。伊弉諾尊と

伊弉冉尊は国と多くの自然神を生んだ後「**天下の王者を生まざらむ**」(同35頁)とこの三神を生んだ。

第六段は素戔鳴尊と天照大神の誓約(新編『書紀』①、61頁)説話である。この誓約により、宗像の三女神と天忍穗耳尊を初めとする五、又は六男神が生まれた。第五段と第六段の時期は青銅武器形祭器と銅鐸を使った祭りが始まった「**青銅マツリ第Ⅰ段階**」(学術『歴史02』181頁)の前150年頃から、前50年頃の事である。

第七段は素戔鳴尊の乱行と追放(新編『書紀』①、75頁)説話である。素戔鳴尊は天照大神との誓約で潔白が証明出来たとして高天原に留まり、数々の乱行を行った。それに怒った天照大神は磐戸に閉じこもった。この天岩戸事件の解決の後、素戔鳴尊は追放された。

第八段は、追放された素戔鳴尊の降下した出雲国での八岐大蛇退治と大己貴神の誕生(新編『書紀』①、91～93頁)説話である。第七段と第八段の時期は出雲で銅剣形祭器と銅鐸の埋納のあった前80年頃から、西日本各地に鉄器の普及と独自性青銅器(銅戈)を使った祭りが生れた「**青銅マツリ第Ⅱ段階**」(学術『歴史02』181～183頁)前50年頃を経てのAD50年頃のことである。

3. まとめ

『記紀』神話の表す世界は天国である対馬・壱岐と玄海灘沿岸及び北部九州である倭国の繁栄と発展を物語ったものである。大陸や半島から水稻農耕が伝わり定着し、富(余剰米)の蓄財が始まると、格差が始まり、小共同体ができ、階級的首長と環濠集落が出来た。その環濠集落の家を構成する二本の主柱と耕作の営みから高天原の三神が生まれた。西日本各地への水稻農耕と環濠集落の拡散が始まり、交流が起きると伊弉諾尊と伊弉冉尊を誕生させ、国産みをさせた。北部九州で小共同体がクニ(百余国)になり、クニから国(三十許国)への統合が始まると、各国ごとに祖神を創り出した。これが高天原での誓約や天岩戸事件などの各氏祖神の活躍である。また、倭国と強国出雲との交流、交渉が素戔鳴尊の出雲降下と八岐大蛇退治となる。そして、『書紀』巻第二、神代下の天孫・皇孫降臨神話に繋がって行くのである。

倭の五王 —『宋書』の倭國— その5

名古屋市 石田敬一

当会報誌の204号（同年8月号）では、中国風一文字名称の問題、書紀の史書としての性格、高宮八幡宮の社伝、筑紫の磐余稚櫻宮や磐余池、磐瀬宮と朝倉橘広庭宮の関連、大津皇子の歌による筑紫の五十川村と日佐村と譯語田舎、そして履中の皇子の墨江中王の名などから、**第十七代履中**が九州の天皇である可能性を探りました。

さて、履中記には、このほかに気になる地名が登場します。

難波宮と石上神宮です。

本坐難波宮之時、坐大嘗而爲豐明之時、於大御酒宇良宜而大御寢也。爾其弟墨江中王、欲取天皇、以火著大殿。於是、倭漢直之祖・阿知直、盜出而乘御馬令幸於倭。故到于多遲比野而寢、詔「此間者何處。」爾阿知直白「墨江中王、火著大殿。故率逃於倭。」爾天皇歌曰、……………<歌の關係部分を省略>……………故、上幸坐石上神宮也。

（『古事記』）

履中は、即位してからは磐余稚櫻宮にいたはずですが、この記事の難波宮は、父の仁徳の皇居である難波高津宮のことと思われます。

この難波高津宮は、通説では、浪速高津宮（高津神社、大阪府大阪市中央区）としますが、先述のとおり筑紫・難波にも高津神社（福岡県筑紫郡那珂川町山田359-3）があり、その本宮は**伏見神社本宮**（福岡県那珂川町山田）です。

ただ、仁徳記には、この説話以前に「大雀命、坐難波之**高津宮**、治天下也」とあり、また仁徳記にも「都難波、是謂**高津宮**」と記述され、すでに**仁徳の皇居**については高津宮とされていますので、この履中記の難波宮を、高津宮と理解してよいのか、やや疑問が残りますが、一応、筑紫・難波の高津宮の本宮である**伏見神社本宮**としましょう。

以前にも述べたように、筑紫・難波の高津神社の御祭神は、**伏見神社本宮**から頓宮された**豊宇気**

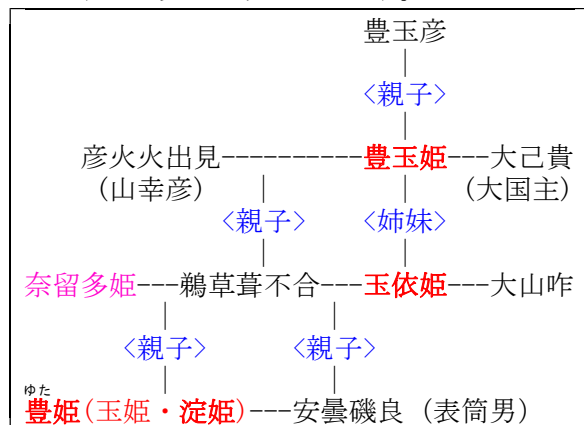
毘売神とある一方、**伏見神社本宮**の由緒書きには、御祭神は、**淀姫命**を筆頭に、須佐之男命、大山祇神、神功皇后、武内宿禰とあり、**豊宇気毘売神**はありません。さらに、由緒書きには「**淀姫命は神功皇后の姉姫で千珠満珠を求め給う神徳の姫で欽明天皇二十五年十一月朔日佐賀の県に川上大明神として鎮座されたが託宣によって此の地に遷座され……**」とあり「**淀姫命は神功皇后の姉**」と書かれています。また「**佐賀の川上大明神**」を遷座されたとも記されます。その佐賀の川上大明神は、川の守護神である**與止日女大明神**とされ、佐賀県佐賀市大和町大字川上にある**與止日女神社**に祀られています。この神社は、**淀姫神社**、**河上神社**とも言われます。ただし、**與止日女神社**の由緒書きでは、「**淀姫は神功皇后の妹**」とされ、**伏見神社本宮**の由緒書きとは姉と妹で違っており混乱しています。

一方、高津神社の御祭神である**豊宇気毘売神**は、食物・穀物を司る女神で、後に稻荷神と習合し同一視されるようになったので、稻荷神社である高津神社に**豊宇気毘売神**が祀られるのは当然ともいえましょう。ただし、**豊宇気毘売神**は、**淀姫命**と同一ではないはずなので、やはりどこかで混乱しているように思われます。

これに関して、山田裕氏ご紹介の百嶋神社考古学の神代系図（以下、百嶋神代系図）では、彦火出見尊である山幸彦を父、豊玉姫を母として、その子が鵜草葺不合命になりますが、豊玉姫は子育てを放棄して竜宮に帰ってしまい、その代わりに異母妹の（鴨）玉依姫が子育てをします。鵜草葺不合命は、その育ての母である玉依姫と婚姻し、安曇磯良（表筒男）をもうけています。その安曇磯良の妻が、同父の鵜草葺不合命と奈留多姫の間に生まれた娘である**豊姫**であり、玉姫・淀姫でもあります。

したがって、鵜草葺不合命からすれば、豊玉姫が実母であって、（鴨）玉依姫は、乳母であり妻です。安曇磯良からすると豊玉姫が祖母であり（鴨）玉依姫が実母になります。また、豊姫（玉姫・淀姫）からすれば、（鴨）玉依姫は叔母であり義理の母という関係にありますので、豊玉姫と玉依姫は異なる人物であり、また彼女らは、豊姫（玉姫・淀姫）とも異なる人物です。

整理すると次のようになります。



ここに登場する姉の豊玉姫、妹の玉依姫は、それぞれ満珠、干珠に擬えられ、安曇族の海神豊玉彦の娘とされますので潮の干満に大いに関わりがあります。伏見神社本宮の由緒書きでは、その祭神の淀姫命は、「神功皇后の姉姫で千珠満珠を求め給う」と記されていますので、淀姫命を姉の豊玉姫に充てています。しかし、興止日女神社の由緒書きでは、「淀姫は神功皇后の妹」とされ、伏見神社本宮の由緒書きとは姉と妹で違ってしています。いずれにしても「千珠満珠」の点では、淀姫命は、豊玉姫と玉依姫の両方にかかわるようです。

さらに、百嶋神代系図では、豊姫は、玉姫や淀姫と同一で、鴨草葺不合命の娘であって、河上タケルの妹(表筒男・安曇磯良の妻)にあたります。豊姫は、後に興止日女神社(川上神社)の河上大明神になりますので、豊姫を淀姫とする百嶋神代系図と合致します。これに従えば、伏見神社本宮の御祭神の淀姫命は、豊姫と同一ということになります。

一方、頓宮した高津神社では、その祭神を豊宇気毘売神とします。一説に、淀姫は豊玉姫であるともいいますので、本宮で祀る淀姫命を豊玉姫とみなして、その豊玉姫と、豊受姫とを混乱しているのではないかと想像します。百嶋神代系図では、豊受姫は豊玉姫のいとこであり、豊受姫と豊玉姫は神としての役割も違いますので同一人物とはいえません。また、海の神である豊玉姫と川の神である淀姫は同一とはいえませんが、時代の変遷とともに「千珠満珠」に関わる神として、豊玉姫は、淀姫へと移行・集約化してきたようです。

以上を総合すると、淀姫命は、「千珠満珠」に関

わり、大津波や洪水を防ぐ女神全般を包括する神を意味しているのではないかと思います。

そして、淀姫命は、豊玉姫や玉依姫にも広くあてられる女神になり、百嶋氏が示すとおり、淀姫命は、豊姫や玉姫にあてられたのだと思います。

さて、百嶋神代系図では、この玉依姫に「千珠満珠」を授けた山幸彦は、彦火火出見であり、また饒速日でもあるとされます。饒速日は、物部氏の祖であり、古くより天皇に関わっています。

次の履中記の記事の中に、物部氏の総氏神である石上神宮が記されています。

上到于倭詔之、「今日留此間、為祓禊而、明日参出、将拜神宮」。故、號其地謂遠飛鳥也。故、参出石上神宮、令奏天皇、「政既平訖、参上侍之」。尔、召入而相語也。 (『古事記』)

この履中記の説話では、隼人を騙し討ちにした水歯別命は、石上神宮に居る履中へ報告に行くということになります。書紀では石上振神宮とも記されます。この説話の石上神宮や石上振神宮は、奈良県天理市布留町の石上神宮とするのが通説ですが、この説話に記されている石上神宮(石上振神宮)はそうとはいきれないようです。

私の考えでは履中の太子宮は筑紫・難波にあり、そこから馬で行くところに石上神宮があるのですから、筑紫・難波から比較的近くに位置するのではないのでしょうか。つまり、北部九州にあると思われる。

履中記では、阿知直一人が太子(履中)を助けたことになっており、履中紀では、やはり石上振神宮に馬で逃れ、平群、物部、阿知直の3人が登場し、物部大前宿禰が関わっています。

爰仲皇子畏有事、將殺太子、密興兵圍太子宮。時、平群木菟宿禰・物部大前宿禰・漢直祖阿知使主、三人啓於太子、太子不信。【一云、太子醉以不起。】故、三人扶太子、令乘馬而逃之。【一云「大前宿禰、抱太子而乘馬。」】……<中略>……太子便居於石上振神宮。 (『日本書紀』)

履中が任官として採用した物部大前宿禰は履中を引率して、物部の軍事拠点である石上振神宮に太子をかくまったようです。

遠賀川流域の鞍手には、剣神社(福岡県鞍手郡

鞍手町新延1998)、熱田神社(もと剣神社、鞍手町新北1565)を始めとして剣にかかわる神社が数多くあり、物部氏の軍事拠点とされます。この地域に、この記事の石上神宮にあたる神社があります。

『福岡県神社誌 上巻』(大日本神祇会福岡県支部、昭和20年、261~262頁)によれば、福岡県鞍手郡鞍手町古門1237番にある古物神社は、もともとは剣岳の剣神社と八幡宮の二つの産土神であったのが、剣神社の神殿などが倒壊したために合祀し古物神社に改めたもので、さらにその後布留神社を合祀しています。剣神社縁起では、天智天皇の御世に僧の道行が熱田の神剣を盗み新羅に行こうとした時に、この古門に草薙の剣(十握剣)が落ち、神剣は熱田に返されたものの、ここが「石上布留魂大神の座所」であることにはかわりはないので布留毛能村と号したとのこと。そして、古物神社の祭神である布留御魂神は、物部氏が祀る奈良の石上神宮と同じ祭神です。また、僧・道行が新羅に渡ろうとして捉えられた古門は、古くは遠賀川の入り江にあって、古物神社の北東に近接して津(鞍手町古門掛津)があり、北約1kmにも、港(遠賀郡遠賀町虫生津)があったところであり、僧・道行が新羅へ渡航するのに捉えられた場所として相応しいと理解できます。

神剣が納められていたと私が推測している熱田神社は、その古物神社から南へ約4kmの鞍手町新北にあります。由緒書きには、景行二十七年(277年?)の日本武尊熊襲征伐の時に亀甲の古宮で戦勝祈願し、その熊襲征服の帰途の際にこの社に立寄り報賽を行ったとあり、そして文治元年(1185年)には尾張國熱田大神を相殿に勧請したとされます。神剣についての記述はありませんが、この熱田神社は、剣岳の西麓にあり、また剣岳山頂(標高123m)には八剣神社の上宮があり、その剣岳史蹟碑には、「草薙剣を奉護す 天智天皇七年」と刻まれており、神剣との関連が想起されます。また、剣岳の山頂近くには日本武尊が住んでいたと伝わる熊野宮跡があります。八剣神社の御祭神は、日本武尊・宮簀媛命・須佐鳴尊であり、まさに草薙の剣にまつわる三者が祀られており、石上神社は布留神社ともいわれますので、この説話に登場する石上神社は、この遠賀川流域の鞍手の地にある古物神社の可能性があると思います。

前回の例会の内容

■天孫・皇孫降臨と邪馬壹国

一宮市 竹嶋正雄

201・203号に投稿した「天孫・皇孫降臨と邪馬壹国(1)(2)」について発表した。

天孫・皇孫が降臨した葦原中国は、倭国である北部九州とし、高木神の名を持つ高皇産靈尊は、吉武高木遺跡のある室見川流域の奴国に降臨し、その皇孫瓊瓊杵尊は日向峠を越えて伊都国に入り、奴国・伊都国同盟を結び倭国を代表するに至った。その後、卑弥呼が共立され、邪馬壹国が倭国の代表になったとした。

以下は、このほかに発表された表題です。

■宣化天皇期の大和王朝屯倉から九州への糧の移送

一宮市 畑田寿一

■『運歩色葉集』における古代逸年号(1)

瀬戸市 林 伸禧

■谷本茂著「倭国年号の史料批判・展開方法について」について

瀬戸市 林 伸禧

■倭の五王『宋書』の倭国一その4

名古屋市 石田敬一

また、時間の関係で次の論考は、資料配付のみとなりました。

■鉄の古代史

知多郡阿久比町 竹内 強

例会の予定など

■ 今月の例会

(1) 日時 9月17日(日) 13:30~17:00

(2) 場所

名古屋市市政資料館 第2集会室

名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051

(3) 参加料 500円 (会員は不要)

(4) 交通機関

・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分

・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分

・市バス「市政資料館南」、北徒歩5分

・市バス「清水口」、南西徒歩8分

・市バス「市役所」、東徒歩8分

(5) 駐車場 市政資料館:12台+α収容(無料)

■ 来月以降の例会 10月15日(日)

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を25部用意ください。

■ 投稿締切日 9月30日(土)

・全て11ポイントでべた打ちしてください。

■ 投稿先(編集担当:石田)

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp